

評価を生かした学校づくり

(保健体育研究室) 山本 万喜雄
 (附属特別支援学校) 池谷 三和子
 (前附属特別支援学校) 赤岡 英子

USE OF SCHOOL MANAGEMENT EVOLUTION FOR EDUCATIONAL IMPROVEMENT

Makio YAMAMOTO, Miwako IKETANI and Eiko AKAOKA

(平成19年6月8日受理)

はじめに

学校の評価をどう進めるか。今、学校を評価する仕組みが駆け足で整備されている。すなわち2002年に「小・中学校設置基準」が制定され、学校における自己評価やその公表・説明責任の必要性が求められるようになった。また、2004年に中央教育審議会答申「今後の学校教育の管理運営の在り方について」を受け、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」(第47条の5)による学校運営協議会の位置付け、さらに、昨年度には「義務教育諸学校における学校評価ガイドライン」(文部科学省)により、学校と地域社会との連携・協力、学校評価の見直し等がこれまで以上に必要とされるようになった。学校運営に保護者や地域住民の声を生かし、全教職員で共有しながらよりよい運営を行うことが大切である。

愛媛大学教育学部附属養護学校(現附属特別支援学校：2007年4月1日より名称変更)では、保護者を含めた学校関係者の意見を学校運営に反映していくため、学校評価システムを有効に活用していく方法を模索してきた。学校評価の有効活用を目指した方法とは、2004から2006年度にかけて取り組んできた、①学校評価の方法と内容の検討、②学校評価説明会を利用した自立的・継続的な学校改革・改善である。このような学校評価で重要なのは、他との比較ではなく、学校が改善点を見付けることである。

本稿は、附属養護学校(以下本校という)における学校評価の現実を捉えながら、それに影響を与える教員の研修と保護者の自律的な力量形成の方途を探るという課題

の下に執筆された共同研究である。その構成は、学校評価の有効活用、研修活動と地域貢献、ともに育ち合う「子育てトーク」の3章から成る。執筆者は、学校運営に責任をもつ校長と副校長、研修に責任をもつ研修部長であり、附属養護学校という名を冠した最後の、「評価を生かした学校づくり」の報告である。

I 学校評価の活用

1 研究の内容

2006年度に、愛媛県教育委員会で作成された「よりよい学校づくりのために一学校自己評価システムを生かして」と「よりよい学校づくりのために一学校評価に関する実践事例集」の2冊を参考にして教職員・保護者向け評価を作成・実施することによって学校運営の見直しを図ることにした。

(1) 教職員用自己評価・保護者用学校評価アンケートの作成と実施

評価項目は、年度当初作成した下記の学校経営案(図1)を基に、学校として特に力を入れて取り組みたい重点課題を絞り込み、4段階で評定する学校評価アンケートを作成し、実施した。

学校経営案		職員会資料 2004・4・11
1	本校の任務	
①	教育基本法及び学校教育法に基づき、知的障害のある児童生徒の教育に当たる。	
②	愛媛大学教育学部の附属校として、教育理論及び実践についての研究と教育実習や介護等体験の場を提供し、その指導に当たる。	
③	附属校として実践的研究の成果を生かし、市街の中心地にある地域の養護学校として特別支援教育のセンター的役割を担う。	
2	教育目標	
	「たくましく 生きぬく力を しなやかに」	
○	元気な身体を養う。(体力・持続力・巧緻性)	めさす子ども像 明るい子
○	豊かな心を育てる。(明るく、楽しく、仲良く)	
○	やる気を育てる。(意欲・積極性・自主性)	
○	生き抜く力を育てる。(身辺処理能力・社会適応力・働く力)	

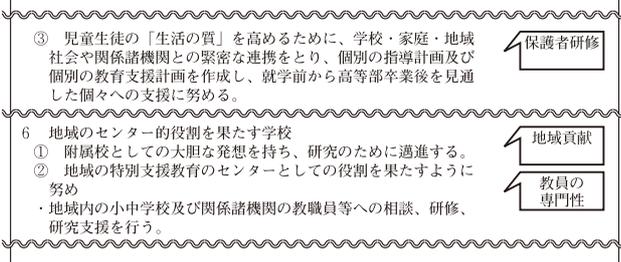


図1 学校経営案

(2) 教職員・保護者への学校評価説明の場

教職員と保護者には図3の学校評価のアンケート集計結果を配布し、図2のように学校評価を生かした取組ができるような流れを作った。

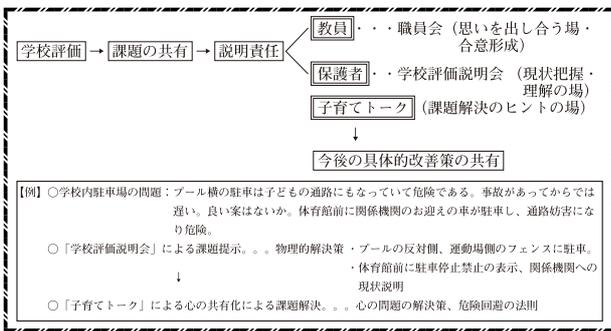


図2：学校評価を生かした学校経営

教職員用学校評価アンケート				
1…非常に努力・改善を要する 2…やや努力・改善を要する 3…よい 4…大変よい				
番号	評価項目	評価	反省・2学期への課題及び提言	
学校の教育目標	1 学部及び学級経営や指導の中で教育目標の具現化に努めているか	1 2 3 4 4 21	・各々の教職員が自分の持ち場を守りながら、充実した附養のために力を注いでいることはとても嬉しい。	
	2 児童・生徒は「目指す子ども像」に育っているか	1 2 3 4 4 21 1	・いのちを育む学校に喜んでやってくる姿は誠に嬉しいかぎり。	

保護者用学校評価アンケート				
A…大変よい・よくできている・成果が上がっている B…よい・できている・成果がありがたつある C…あまりあてはまらない・あまりできていない・一部見直しが必要である D…よくない・できていない・見直しが必要である				
評価項目	A	B	C	D
1 学校に安心してお子さんを預けることができますか。	小 7 中 6 高 12	5 2 11		
2 お子さんは楽しく学校に通っていますか。	小 10 中 6 高 12	2 1 11	1	
3 お子さんは願う姿に育っていますか。	小 6 中 3 高 6	7 3 13	1	4
4 学校と家庭とが連携を図り、相互の信頼関係ができていますか。	小 6 中 4 高 7	5 3 14	2	1 1 2

図3 教職員用(上)・保護者用(下)学校評価アンケートとその集計

(3) 学校評価の説明責任と重点課題の設置

年に2回(1・2学期末)、学校評価を実施し、その集計結果を2学期始め(9月の月上旬)と3学期始め(1月上旬)に提示し、課題を明確に絞り込んで説明する機会をもった。

教職員向けには職員会を利用して共通理解を図るため、アンケート集計結果を単なる数値の処理の提示だけではなく、考察も入れた図4のような学校評価を受けて取り組むべき重点課題を示し、改善に向けた。詳細は後の2章の「研修活動と地域貢献」で述べる。

学校評価の在り方についてもP D C A (plan・do・check・act)サイクルを有効に活用し、改善を加えた。学校評価 アンケートの評価項目等も学校評価検討委員会において検討を重ね、年度ごとに改善が加えられた。

保護者向けには「学校評価説明会」と保護者研修会「子育てトーク」と連動した形で学校評価の説明の機会を設けた。前半30分は学校評価のアンケート集計結果等データを提示して、今後の課題等を話し合い、後半は、「子育てトーク」によって、前半で出た課題解決のヒントを狙うものである。

1 会計管理はきちんと、会計簿については必ず2人以上の目を通す。明確化・透明化が必要。	・農園会計から堆肥や種・苗、耕耘機の刃の修理代、が出ている。
・農園・作業会計・教育実習関係・PTA関係・その他全体にかかるものは大まかな見通しが欲しい。どの程度のものをどの様に使えるのか。最終的な配分を各学部主事及び副校長に伝える。	・介護実習や教育実習についての費用が速やかに学部配当され、実習費に対応されていた。
3 職員会の能率化	・努力しているが、どうしても各係が直前に準備してしまう。余裕がないが、努力できないものか。
・事前に協議内容を示し、配付できる資料は事前に配付し、一読しておく。	
4 報告、連絡、相談をきちんとする。	・各学部によく伝達されていないことも多々あったのではないかと。伝達しても聞いていないこともあるのではないかと。一人一人の意識の持ち方を聞きたい。
・組織を生かして学部伝える。各会の学部代表者は自分の役割をきちんと認識し、伝達する。	
5 校務分掌の偏り：明確化	・来年度はきちんと反省を生かしたい。
・サブがフォロー ・遠慮せず任せられるところはお願する。	・もっと各係で組織化し、役割分担すべき。
・学部単位でフォロー (子どもがいる時、必然的な校務の場合、学部体制で出せるような体制を。)	・時間の余裕もであるが、精神的なゆとりがない。
○ 評価項目の中で「2」の評価が多いものに着目し、改善の方策を考える。	・学校評価の時期のみに評価していくのではなく、常に、情報や意見交換をしたいが時間の確保は難しい。
・評価項目4の校務の分担の適切化	その為には、校内ランを用いて、気軽に意見を書き込める工夫があればと思う。
・評価項目6学校行事などの教職員の役割分担、共通理解	
・評価項目17の研修組織の有効機能・評価項目18の資質向上、自己研修	

学校評価から得られた課題 → 教員研修の充実・教員の力量の向上

図4：2学期の評価を受けて

1 会計管理はきちんと。会計簿については必ず2人以上の目を通す。明確化・透明化が必要。 ・農園・作業会計・教育実習関係・PTA関係・その他全体にかかるものは大まかな見通しが欲しい。どの程度のもをどの様に使えるのか。最終的な配分を各学部主事及び副校長に伝える。	・農園会計から堆肥や種・苗、耕耘機の刃の修理代、が出ている。 ・介護実習や教育実習についての費用が速やかに学部配当され、実習費に対応されていた。
3 職員会の能率化 ・事前に協議内容を示し、配付できる資料は事前に配付し、一読しておく。	・努力しているが、どうしても各係が直前に準備してしまう。余裕がないが、努力できないものか。
4 報告、連絡、相談をきちんとする。 ・組織を生かして学部配当に伝える。各会の学部代表者は自分の役割をきちんと認識し、伝達する。	・各学部にうまく伝達されていないことも多々あったのではないかと。伝達しても聞いていないこともあるのではないかと。一人一人の意識の持ち方を聞きたい。
5 校務分掌の偏り：明確化 ・サブがフォロー 遠慮せず任せられるところはお願いする。 ・学部単位でフォロー（子どもがいる時、必然的な校務の場合、学部体制で出せるような体制を。）	・来年度はきちんと反省を生かしたい。 ・もっと各係で組織化し、役割分担すべき。 ・時間の余裕もであるが、精神的なゆとりがない。
○ 評価項目の中で「2」の評価が多いものに着目し、改善の方策を考える。 ・評価項目4の校務の分担の適切化 ・評価項目6の学校行事などの教職員の役割分担、共通理解 ・評価項目17の研修組織の有効機能 ・評価項目18の資質向上、自己研修	・学校評価の時期のみに評価していくのではなく、常に、情報や意見交換をしたが時間の確保は難しい。その為には、校内ランを用いて、気軽に意見を書き込める工夫があればと思う。
学校評価から得られた課題 → 教員研修の充実・教員の力量の向上	

図4：2学期の評価を受けて

(4) 学校参観者向け外部評価の実施

従来から実施してきた自己評価や学校評議員会だけでは分かりにくい部分もあるのではないかとという声が運営委員会から上がった。そこで、図5のような参観者への学校評価アンケートを実施した。外部評価の方法として、研究大会や学校見学、教育実習等、外部から教育関係者や関連機関(教育・福祉・医療・労働・地域)、学生等が学校参観する機会も多いので、本校が研究会会場や会合の場所になった時、参観者を対象にアンケートを実施した。

(5) 学校評価アンケートの集計結果

学校評価検討委員会での反省を踏まえて、2005年度には、従来の全体的な観点で付ける学校評価に、教員用自己評価も付け加えた。2005年度には、特に2004年度の学校評価で上がった重要課題である「児童生徒への適切な支援」とその為の「教員の専門性の向上」について重点的に取り組んだ。図6は、2005年度の1・2学期末に実施したアンケート調査の「あなたは専門性・教職員としての資質向上に努めたか」「あなたは児童生徒一人一人の実態に合った指導をしているか」についての評価項目の結果を示したものである。

参観アンケート

愛媛大学教育学部附属養護学校

参観期日	平成	年	月	日	()
参加者氏名					所属
住所 (勤務先・自宅)	〒 () Ⅲ ()				
参観内容	※該当するところを○で囲んでください 学習活動(小学部・中学部・高等部) 施設(作業室・各教室・津田山宿泊訓練) その他 ()				
アンケートに御協力ください	A 非常によい	B よい			
	C やや努力・改善を要す	D 努力・改善を要す			
① 学校の教育環境についてふさわしい環境でしょうか。(環境・設備)					
② 一人一人の児童生徒の発達や心情に応じた支援ができていましたか。					
③ 衛生面や安全管理への配慮ができていましたか。					
④ 来客に対する教職員の対応は適切でしたか。					
参観後の御感想・御意見	(今後の教育に生かしていきたいと思っておりますので、御自由に御記入ください。)				

図5 参観者用外部評価アンケート

図3のアンケートに示されているように4段階で評価した。評価1は1点、評価2は2点、評価3は3点、評価4は4点として、それぞれの評価を人数でかけて、その和を平均してグラフに表したものである。課題を重点化して全校的のものとして取り組んだことによって、2004年度はももちろんであるが、1学期に比べ、2学期の評価の平均はずいぶん数値的には上がっている。

次に、図7は2004～2006年度の2学期末に実施した保護者用学校評価アンケートの集計結果である。

評価項目は、1の「安心して子どもを預けることができるか」や6の「学校と家庭とが連携を図り相互の信頼関係ができていますか」等の10項目について回答し、最後は自由記述で記入するものである。

図2のアンケート調査結果に参照しているように4項目で評価した。評価Aは4点、評価Bは3点、評価Cは2点、評価Dは1点とし、その平均をグラフで表したものである。

「先生は子どもの障害を理解し、指導方法の工夫を行っていると思うか」「子どものことで気軽に相談できるか」の評価項目についてこの3年間で大きな伸

びが見受けられた。

2005年度の重点課題：教員用

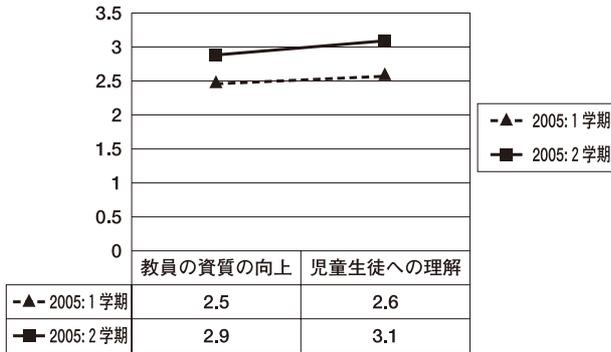


図6 2005年度の取組・・・教職員用

2004～2006年度の保護者用学校評価

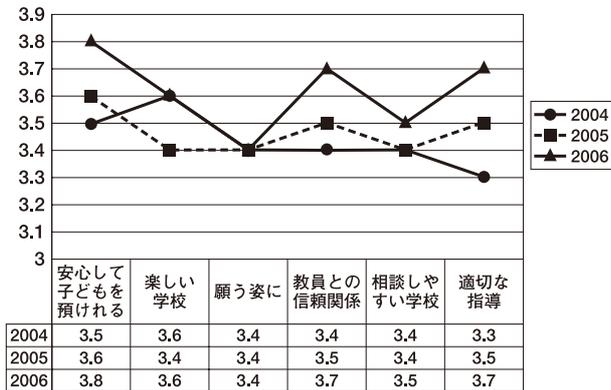


図7 3年間の取組・・・保護者用

5 まとめと今後の課題

学校評価によって事前に教職員や保護者の思いや悩み等の実態把握をして解決の場を提供することは必要なことである。日ごろの不満を貯め込むのではなく、問題が大きくなる前に、学校評価によってキャッチした情報を素早く教職員や保護者に返し、問題を共通認識し、話し合いの場を持つことによって解決とまではいかないものの、皆で改善に向けて取り組めたことに意義があった。今後も問題を隠すのではなく何でも言えるような受容的な雰囲気作りに努めることは大切である。

【成果】

- 評価結果を絞って、重要課題を具体的に、取り組むことによって、成果が見られた。
- 「学校評価説明会」と保護者研修会「子育てトーク」とをうまく連動することによってそれぞれの会の良さが生かされ成果が上がった。

○回を重ね、繰り返されることで流れができ、PDCAサイクルがうまく機能したと考える。

【課題】

- ◇学校評価説明会において、参加者の固定化を打破する為、目先を変える、魅力ある企画・運営の工夫が望まれる。
- ◇校内での組織的な評価体制づくりをさらに整備する。
- ◇外部評価委員会の立ち上げによる評価の充実を図る。

II 研修活動と地域貢献

1 校内研修活動

2005年度の校内研修活動は、教員の資質向上はもとより、教員と保護者の合同研修会を設け、子どもの将来に向けた支援を考えていく上で必要な知識を得たり、相互の共通理解を図ったりする場とした。また、2006年度は、地域の学校への支援に関して必要な研修を行った。教員と保護者との合同研修会は日程調整の都合で、別個に設定した。

(1) 実施内容

研修内容や時期の希望を教員と保護者にアンケート調査し、必要性の高い事項について研修会を設定した。

時期	参加者	研修テーマ	講師
'05 7/20(水)	本校教員	障害者自立支援法	本校教員
7/25(月)	本校教員	海外研修報告 シンガポールの教育事情	本校教員
7/26(火)	本校教員 本校保護者	福祉行政・制度	松山市障害福祉課職員 兵頭 利彦
7/29(金)	本校教員	WISC-III知能検査 検査の手順や方法について	本校教員
8/9(火)	本校教員	自閉症児の対人関係 (修士論文報告)	本校教員
8/10(水)	本校教員	新版K式発達検査2001 検査の手順や方法について	本校教員
9/7(水)	本校教員 本校保護者	本校卒業生の現状と課題	ボーイスカウト指導者 友近 規 本校教員
'06 7/24(月)	本校教員	女性人権について	愛媛労働局雇用均等室 杉田 由美子
8/6(日)	本校教員	これからの特別支援教育	特別支援教育士・学校 カウンセラー 渡部 徹
11/29(水)	本校保護者	卒業後の豊かな生活のために ～今の充実と将来への展望～	福角会地域生活者支援 室相談支援専門員 梶浦 英与
'07 2/21(水)	本校保護者	子どもの病気とネットワーク ～どんな子どもも地域で育てよう～	県立中央病院小児科部長/ NPO法人ラ・ファミリエ副理事長 大藤 佳子

(2) 成果と今後の課題

学校教育法の一部改正(2007年4月1日施行)により、「在籍児童等の教育を行うほか、小中学校等に在籍する障害のある児童生徒等の教育について助言援助に努める」旨が規定された。本校においても、地域の特別支援教育のセンター的役割を果たすために、地域の小・中学校等に対する教育上の支援を重視し、具体的な連携に努めてきた。上記の研修活動の中では、連携に必要な子どもたちの実態把握や具体的な支援の方法について考えることができた。今後も、センター的役割を果たすために必要となる情報や考え方を、研修活動の中で習得していくことが望まれる。

2 対外的研修活動

2005年度は、対象のニーズに応じた研修内容として、自閉症児への支援に関すること、軽度発達障害に関すること、就労支援に関すること、福祉制度に関すること等を取り上げ、日々の教育実践に反映できる具体的な内容を計画した。また、愛媛大学から講師を招いての研修会を本校と近隣の県立特別支援学校が合同で企画し、両校の教員の資質向上を図るとともに、県下の特別支援学校、小学校、中学校に呼びかけて、連携体制づくりの一環とした。2006年度は、昨年度の県立特別支援学校との合同研修会を継続して実施するとともに、2004年度より本校主催で実施してきた自閉症児支援についての学習会の充実を図った。

(1) 実施内容

【受講型研修会】

※は県立特別支援学校との合同研修会

時期	参加者	研修テーマ	講師
'05 8/1(月)	本校教員 本校保護者 他校教員	福祉事業の現状	松山南都 生活支援センター 白石 憲征
8/18(木)	本校教員 他校教員	※就労実現を目指す自閉症教育	愛媛大学教育学部 上岡 一世
9/3(土)	本校教員 他校教員	※軽度発達障害の子どもへの支援を考える	愛媛大学教育学部 花熊 暁
'06 2/4(土)	本校教員 本校保護者 他校教員	後見人制度	松山家庭裁判所 認廷管理官 小西 孝雄
8/11(金)	本校教員 他校教員	※支援機器を使った障害児の自己決定・自己実現～おもちゃやソフトを使った環境づくりを通して～	愛媛大学教育学部 菊田 知則
8/26(土)	本校教員 他校教員	※WISC-Ⅲの見方と子どもへの具体的な支援	愛媛大学教育学部 花熊 暁

【参加型研修会】

本校主催のふよう学習会は、2004年度より自閉症児支援の学習会として実施してきた。本会は、参加者同士が事例を持ち寄って検討したり情報交換を行ったりする自主的な学びの会で、参加者も就学前療育機関の関係者、特別支援学校・小学校・中学校の教員、保護者等、幅広い。実践的な研修を重視した参加者主体の学習会を目指して以下のように実施した。

時期	内容及び話題提供者
'05 7/30(土)	自閉症児へのかかわり方を考える～教員と生活支援員との連携～ 話題提供：中学校生活支援員 中学校教諭 本校教諭
8/20(土)	就学前の自閉症児療育 話題提供：療育機関指導員 本校教諭
12/3(土)	自閉症児N君の企業実習を通して就労支援の在り方を考える ～家庭や関係諸機関との連携を生かして～ 話題提供：本校教諭
'06 2/18(土)	自閉症の特性に応じた授業づくり～高等部作業学習～ 話題提供：本校教諭
7/28(金)	自閉症教育の実際～講義を中心に～ ・就学前の自閉症児教育(療育機関保育士) ・特別支援学校における自閉症児教育(本校教諭) ・軽度発達障害の子どもの教育(小学校教諭・中学校教諭) ・成人自閉症者の生活支援(本校教諭)
7/29(土)	自閉症児の行動上の問題への取組～演習を中心に～ ・問題解決シミュレーションワーク～行動分析の立場から～(本校教諭) ・「個別の指導計画」作成の演習 ～目標設定と支援の手だて及び評価の方法を考える～(本校教諭)
7/30(日)	自閉症教育の現状と課題～協議を中心に～ ・グループ協議「自閉症教育の現状と課題」 ・テーマ別グループ協議「課題解決に向けての方策」

(2) 成果と今後の課題

【成果】

- 県立特別支援学校との合同研修会では毎回120～170人程度の参加があり、アンケートでは、「場所、時間、内容ともに遠隔地の教員にとって参加しやすく有意義だった」「特別支援教育体制推進事業の巡回相談にとっても役立つ内容だった」等の感想があった。
- ふよう学習会では、毎回20～70人の参加があり、参加者相互の情報交換や意見交換を活発に行うことができた。

【課題】

- ◇ 受講型の研修会と参加型のふよう学習会のそれぞれの役割をさらに検討する。
- ◇ 就学前療育機関、特別支援学校、小学校、中学校等の特別支援教育にかかわる参加者のニーズに対応するために、様々な立場からの話題提供や講演を企画する。

- ◇ 参加者相互の情報交換や意見交換のさらなる活性化を図るための会の在り方を検討する。
- ◇ ふよう学習会では、附属校園からの参加があり、今後も附属四校園の中で具体的な研修を進めていくことができるよう連携を図る。
- ◇ 愛媛県の特別支援教育体制推進事業で対象となっている幼稚園・保育園から高等学校までの幅広い教育関係者への参加案内を行う。

Ⅲ ともに育ちあう子育てトーク

1 夢追い校長の子育てトーク

子どもたちのすこやかな成長・発達を保障することは、学校の基本的任務の一つである。そのことを自覚する教職員は、一人ひとりの子どもの豊かな育ちを願い、様々な研修を重ねているところである。

また保護者は、学校づくりの大事なパートナーである。私たちは保護者にも学校教育評価に参加を要請し、ともに子どもたちの成長を支えあってきた。それ故、保護者にはその評価の結果を伝えるだけでなく、伝える機会を生かして子育ての学習会を組織しようとした。それが、附養のユニークな活動「子育てトーク」の誕生として結実したのである。

ところで、子育ての悩みはいつも具体的に出てくる。そのような悩みの事実から出発し、子育ての知恵をどう共有するか。地域に根ざした子育て支援のファシリテータとしての経験を持つ山本は、その持ち味を生かして保護者の学習要求に応じてきた。表1は、2004、2005及び2006年度のテーマ一覧である。

第1回の子育てトークでは、子ごころ五つの世界—自己決定、能動性、自尊感情、目的意識、多様性に言及しながら、子育ての願いを語りかけた。その時の話を保護者はどう受けとめたか。2つの感想を示そう。

- 「ホッとできる場にいられてよかったです。長年生きてきた分、子どもが多い分、十分に嫌なこともいっぱいあった人生だけど、いい方に考える知恵もいっぱいつきました。『笑顔のむこうには、いっぱい涙もあつただろう』という校長先生の言葉に、うんうんとうなづく私でした。」
- 「はじめて生まれてきた子が障害児と一緒に死の

うと考えた時が幾度かありました。でも、子どもの寝顔を見るたび、そんなことを考えた自分が情けなく、泣く日々もありました。そんなこんなで私自身も我が子とともに成長したように思えます。私は附属のお母さんたちとお話している時がとても楽しいです。」

表1 子育てトークのテーマ一覧

日 時	テ マ
2004. 7. 14	笑って愛して
9. 13	子育てはよろこび
2005. 1. 15	弱音をはく父さん
2005. 7. 11	日々の悩みを日々のバネにして
9. 12	子どもの健康づくり—日々のくらしの積み重ね—
10. 20	子育て・子育て・親育ち—苦労の先には夢がある (愛媛県知的障害養護学校PTA研修会を兼ねて)
2006. 1. 11	子どもの健康づくり—排泄を中心に—
2006. 5. 24	心やさしく意思つよく夢大きな学校づくり
9. 20	夢追い校長の子ども理解
2007. 1. 15	いのちある言葉に支えられて

この3年、学期毎に学校評価の説明とあわせて開いてきた子育てトーク。毎回30人程度の参加があった。保護者同士の交流の中で課題となったのが、父親の子育て参加というテーマであった。そこで、父親も比較的参加の可能性が高い土曜日に学校行事の参観日を設定し、その後「弱音をはく父さん」というテーマでそれぞれの思いを語りあった。それが第3回の内容である。子育ての主たる支え手である母親が倒れたらどうなるか。こうしたトークを重ねながら、可能な限り父親も子育てに参加するよう、その必要性を伝えた。もちろんひとり親の存在を配慮しつつ語った。

私たちの子育てトークは、別の魅力もある。それは参加者による一口感想の交流である。保護者の本音はどこにあるか。何げないように見える交流活動には大事な役割があった。この子育てトークの場に勤務の関係で参加できない教職員のために、保護者の感想の要約をつくり配布している。次に、その資料(2006.5.24)を示すことにしたい。

2 子育てトークにおける感想の交流

- A： いつも楽しみにしている。この学校にいて得した気分。
- B： 現在、父親は単身赴任でいないが、母親が病気になる時、今までなかったことだが、心配しておでこに手を当ててくれた。高校生としての自覚

- がでてきて成長を感じる。
- C： 周囲が配慮してくれて子どもがスムーズに何でもこなしてくれることがありがたいと思いながらも、いいのかなと考えさせられる。配慮され過ぎていると感じる部分と、今後も気を遣って彼をサポートしなくてはと思ったり複雑。
- A： この学校に来るまでは、いい子にしていけることを望んでいた。しかし、ここへ来て、ある日、いきなり大泣きしたことでこれまで抑えていたことが一気に出了気がして、やっと自分を出して泣ける場所ができたのだと思った。
- D： 学校でのパニックもなく、のびのびと生活している。学べば優しくなれるという校長先生の言葉が印象的。先生に恵まれ学ぶことがあったので、今後は親も育てていきたい。
- E： 小学部から上がり、環境が変わったが、比較的早く馴染んだ。秘めたものはたくさんある子だと思っている。今後は楽しみ。
- F： 「子育て」「親育ち」はしたが、「子育ち」はやっていなかったと反省。何でも兄の真似をさせていけばと、自分で育っていこうとする気持ちを認めていなかったが、今回、先生の力で分かった気がした。
- G： 学部が変わり不安だったが、中学部にいって落ち着いているので安心した。思春期の訪れも気になるが、この頃物を食べなくて痩せているのが心配。
- 山本： この時期、縦に伸びるのが普通で、伸びた後体重も落ち着いてくる。食べなくて痩せているのが気になる。校医に相談する予定。
- H： 母が働いているので、10時のニュースを見ながら夕食ということがある。母が疲れて寝ていると、自分でちゃんと布団を敷いて菌みがきもして寝ている。寝ている母に布団を掛けてくれるように成長することを期待している。
- I： 親として学ぶ場が大切。娘は一人の人間として存在を認められている。
- J： 自主通学を始め、子どもが親から離れていく年齢を実感している。親も「子離れ」していくように、家では「かわいい」は禁句にしている。今後は自信をもたせていきたい。
- K： 学校に行くのが楽しそうで、明るくのびのびとしてきた。農耕に行くと雨にぬれたら溶けるとパニックを起こすことがある。母は大人だから溶けないとも言う。できることをしようとしなないことがあり、ブラジャーを母にさせ、「毎日触ってほしいのよ、ごめんなさいね」と甘えている。
- L： 保健室に行って先生に会うと嬉しそうに手を叩いて喜んだ。先生が変わったが、今の保健の先生にも慣れて笑うようになると思う。守衛さんが毎朝声をかけてあいさつしてくれるせいか、今日初めて守衛さんの顔をまじまじ見ていい顔をした。時間がかかるがわかってくると思う。
- M： 1年生のとき兄の通知票に赤鉛筆で落書きをしてしまい、母は叱ったが、「うまく描いとる」と兄は褒めた。その時、息子に教えられた。通知票は新しくしてもらったが、思い出の通知票をもらっておけばよかった。
- N： 子どもは伸びてはいるが問題行動は親としては悲しいので、はっきり口にした。何でも口でできて相談できるところがこの学校のよさだと感じた。
- O： 食器洗いなどの家事をしてくれるので、宿泊学習の時は家族で困った。電車もバスも一人で乗り、友達に助けられながら何とか頑張っているが、子離れできない親を感じている。
- P： 家で草引きの手伝いをしてくれて助かっている。いなかったら困る。
- Q： 子離れの話が先程から出ているが、主人には姉が居るが姑は一人っ子のように可愛がり、大人になった今でも干渉し煙たがられている。主人のことを「可哀想だ」と不憫そうにするが、嫌がられている姑を見ていると姑が「可哀想」と思ってしまう。
- R： 課題別の学習をする中で、気に入らないことでもやらなければならないという意識が育ちつつあり、頑張っている様子。
- S： 重度の自閉症児だが、的確な指導を受け、いい顔で学校に行っている。
- T： 活発で女番長。兄と喧嘩もするが思いやりがあり、兄弟がいてよかったとしみじみ思う。

U： 4月からの孫の様子を見ていて、生き生きと学校へ行くのを喜んでいるのがわかり、この学校を選んで選択は間違っていなかったと実感している。

V： つい最近、姪がアスペルガーだということがわかった。飼っている亀と話をする変わった面があること、大好きな父親だが同じ靴箱を使用することは嫌だと泣いたことなど、障害について複雑な思いでその話を聞いた。

池谷： お母さん方の本音の部分の話が聞けて良かった。そんな雰囲気のあるこの学校を誇りに思う。人間は好きな人の下で育つ。信頼が大切。前の人良かったのに、とか学部が変わって問題があるので不幸。学部には方針があり、発達段階を踏まえた独自性もあり、また、先生方にはそれぞれ良さがあり、それを認めながら信頼してついてほしい。この子たちは敏感である。親の気持ちが子どもに伝わる。もちろん、私たちも日々邁進して期待に応えていきたい。皆さんには協力していただきたい。幸い校長は温かい方で皆さんを認めながら接してくれ、先生方もそれに応えてくれているので、学校全体がよい雰囲気で活気づいている。人間だから足りないこともあるが、それは話し合いながら、関係の距離を縮めていただきたい。それを埋め合わせるものとして、組織的に全校的に取り組んでおり、個別の教育支援計画や支援会議等もその一つ。教育は短期間では結果が出ない。むしろ、即効性のある教育は危険かもしれないという気持ちで、長い目で見ていただきたい。何かあれば何でも相談してほしい。

山本： 信頼関係に満ちた人々の間で交流できること、私にとってこんな喜びはありません。まさに、「信頼なくして安心なし」の学習会になりました。さて、本日の子育てトークで話したように育つのは子ども自身です。可哀想だからとか親の世話が大変だから「させない—しない—できない」のサイクルではなく、その気にさせる働きかけによって「させる—できる—しよう」というやる気を育むサイクルを大事にしたいものです。そして、妹のいたずらを喜ぶことのできたお兄ちゃんのケー

スのように私たちも肯定的な評価ができるように、今後さらなる子ども理解を深めていきましょう。そう「学ぶことは我に優しく刻むこと」なのです。

3 育ちあいの子育てトーク—成果と課題

心理学者であり、作家の堀田あけみは、自閉症の息子を含む3人の子どもを育てながら出会ったこと、乗り越えたこと、泣いたこと等を『発達障害だって大丈夫』(河出書房新社刊)に書いた。その中で氏は、深刻になりがちな親の本音を紹介しながら、「子育てが大変なのは自閉症のせいじゃない。自閉症だから何もできないわけじゃない」というメッセージを送っている。きょうだいがかかわりあい成長する日々を、研究者としての冷静な分析を加えて記述している。

ここで附属養護学校における子育てトークの成果と課題についてまとめておく。

第1は、育ちあいの子育てトークの場が保護者同士の人間関係能力の向上に役立ったことである。信頼関係のなかでのびのびと発言し、お互いの理解が深まった。

第2は、語り手の成長である。確かな聴き手の存在は、講師の力量の高まりを求める。育てる者が育てられるの言葉通り、講師は当事者によって鍛えられるのである。

第3は、子育てトークへの参加者が固定したという課題である。参加できない人への資料配付などを考慮したものの、参加する人・しない人の固定化は今後の課題として残った。

おわりに

多様化・多元化が求められている昨今、学校教育活動の自立的・継続的な改善が叫ばれ、学校は過渡期を迎えている。これまでのように一元的な知識・理解だけでなく、教職員・保護者・学校評議員・地域・来校者等多面的な立場からの異なる解釈や価値を引き出し、葛藤させ、確かめ合う場として、学校評価は重要な意味をもつことがこの取組によって実証された。

取組を進めていく中で、記述式アンケートのみでは限界があることに気付き、2年次より、教職員については、

記名式の形をとり、個別に面接を行い、一人一人の意見等を聴取したことは有意義であった。そのためには、受容的姿勢と普段からの人間関係も重要である。また、保護者においても、アンケートのみでは表現できない場合、アンケートに記名して貰い、相談という形で意見を聞くことによって、本音の部分を聴取でき、有効であった。ここで、気を付けなくてはならないことは、内部評価・外部評価ともに意見はあくまで参考とするべきで、運営委員会等で全体的な視野で検討していかねば方向性を見失う場合もあるということである。情報を入手する場合、建設的な意見を聴取できるように工夫する必要がある。

2004から2006年にかけての学校評価システムを生かした取組によって、明らかにマンネリ化しつつあった学校は活性化した。特に学校運営に責任をもつ管理職が、ビジョンと戦略を明確に位置づけリーダーシップをとることが求められる。しかし、学校評価を実施して感じることは、学校評価のPDCAサイクルの有効性は実感するものの、即改善できるものと毎年同じ課題が残るものがあることである。例えば、「校務や会合で忙しく余裕がない」「子どものための教材研究の時間がもてない」「変形労働制を有効に使えない」等であり、学校体制の改善・工夫のみでは済まされない課題も山積している。今後は以下のことに取り組みたい。

- 外部評価委員会等の組織の充実
- 学校自己評価の公表、自己評価票の作成
- 第三者評価の導入

この「学校評価を生かした学校づくり」のまとめに当たって、附属養護学校の教職員、とりわけ、各種研修会や「ふよう学習会」を支えてくれた仲間たちに感謝の意を表したい。

【主な参考文献】

- 1) 愛媛県教育委員会『よりよい学校づくりのためにー学校自己評価システムを生かしてー』2002
- 2) 愛媛県教育委員会『よりよい学校づくりのためにー学校評価に関する実践事例集ー』2003
- 3) 文部科学省『新しい時代の義務教育を創造する』(中央教育審議会答申) 2005
- 4) 文部科学省『義務教育諸学校における学校評価ガイ

ドライン』2006

- 5) 教育評価研究会編『学校の評価・自己点検マニュアル』ぎょうせい2002
- 6) 小松郁夫『教育改革と学校評価システムの開発』国立教育政策研究所2007
- 7) 教育センター『学校評価の充実に関する調査・研究』2006
- 8) 愛媛大学教育学部附属特別支援学校『子どものニーズにこたえる学校であるために』2005
- 9) 同上 2006
- 10) 堀田あけみ『発達障害だって大丈夫 自閉症の子どもを育てる幸せ』河出書房新社2007

